編集後記

前号以来 4 年の歳月を経て、『臨床教育人間学』第 14 号が発刊される運びとなりました。院生に発表の場を、と多大なご尽力をいただいた編集責任者の齋藤直子先生に、一院生として、感謝申し上げます。

本誌タイトル『臨床教育人間学』には当初、耳慣れなさ、言いづらさを感じました。というのはその名が、所属講座・コース名として慣れ親しんできた「臨床教育学」と微妙に重ならないからです。しかしこの耳慣れなさこそが、普段何気なく口にする「臨床教育学」について、その歴史を意識しつつ考え直すきっかけを与えてくれました。

本号の論文が提示する多様な世界に触れると、ここ臨床教育学コースが、具体的な教育場面や個別の子どもや教師との性急な結びつきを強いることなく、人間と教育について、その深みに迷いこみつつ考える場となってくれていることを感じます。そうした場から改めて、「臨床教育学」が講座としての創設当初、「臨床」の意味合いを形作っていく上で目を向けたような、教育の日常、大人や子どもの日常との関係を作っていくことができるのではないか、と考えます。

創刊から 20 年間、多くの先生方の手によって、また院生の携わりを経てつながれ、発刊を迎えた『臨床教育人間学』第 14 号が、その耳慣れなさに立ち止まる人たちの間に対話を生み、そのつど「臨床教育学」への問い直しを誘う場となってくれることを願います。

なお、本号の刊行にあたっては、責任者の齋藤直子先生のもと、研究室の多くの院生が編集作業を行いました。編集補佐一人では担いきれない仕事を、たくさんの温かい声かけとともに分けもってくださったみなさまに、この場を借りて、お礼申し上げます。

2019 年 7 月 5 日

京都大学大学院 教育学研究科 臨床教育学コース
博士後期課程　森 七恵